

日本書紀傳

十五卷四

三十八

書 和
一〇五二二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (47)	
函號	特	85 1



文
教
印

文
教
印

文
教
印

此ハ此段のミハ係れる事あらずニ柱御祖神の國生
 の御始より起りて天壤と共ハ無窮く現御神と天下
 所知者す皇御孫尊の天津日繼の御上ハ係りて甚
 專要と有る大事此ハ過たるハ無き故ハ口を究めて
 説往く事ふり後世予が志を継ぐ者有るハ神と皇と
 の大道ハ忠臣イソツキトふりじりし此ハ事ハ異ふれども如此
 非の決め難き時ハ相與共ハ誓を成す事即古の道
 美内宿禰於是二人各堅執而争之是非難決皇勅之令
 請神祇探湯是以武内宿禰與美内宿禰共出磯城
 川濱為探湯武内宿禰勝之有類是此ハ獨素茂鳴
 例ハ引くハ異ふる事ハ有れども此ハ獨素茂鳴
 尊のこゝろハ日太神の御方ハ有る疑ハく所思食
 させ御在り坐す事の當否を足させ給ハハ御為ハ先

内一三六八三號

○日本書紀傳十五

○百六十

大御自此事ハ及バセ
給へる者ズクハ如此ク
上ノ下ノ活ケセテ其
蹟ヲ探ズバ有ヘク

素戔嗚尊對曰吾元無黑心但

父母已有嚴勅將永就乎根國

如不與姊相見吾何能敢忝是

以跋涉雲霧遠自来參不意阿

姊翻起嚴顏于時天照太神復

問曰若然者何以明爾之赤心

也對曰請與姊共誓夫誓約之

中誓約之中此云宇必當生子

如吾所生是女者則可以為有

清心 キヨキヨロ

此ハ上云る如く素戔嗚尊の天ニ参上り坐す状の
甚ニ凌兢しく御在り坐が上ニ其所依れ給ひし國を
知らず剗へハ根國ニ入給ふ御心ふる由を御父大神
ニ聞え上させ置ふがごとく却りて天ニ向ハせ給へるふ
と異りし御行ふとも御在り坐すふやと天照太神の
御心行ず所思し着し御在り坐て武き御備共有て待
構へさせ御在り坐す所へ既ニ至り着せ給へる故ニ
様ニ詰り問せさせ御在り坐しつゝバ御答申奉らせ

給ふ所ふるふり然るニ古事記ハ此所を上の待問
何故上来と有て尔速須之男命答白僕者無邪心唯大
御神之命以問賜僕之哭伊佐知流之事故白都良久僕
欲往妣國以哭尔大御神詔汝者不可在此國而神夜良
比夜良比賜故以為請將罷往之狀参上耳無異心尔天
照太御神詔然者汝心之清明何以於是速須佐之男命
答白各宇氣比而生子と有て次ニ御誓の件ふり御紀
の趣ニ大旨違ふ所無しと雖も交不得たる所得ぬ所
又意を加へて聞く可き所ふむ有ぬ可き事ふりける
然りと雖も此ハ一書までの全文を擧て論じハむハ
餘ハ煩ハしけれバ其ハ件ニ刻ニ云て此ハ正書を

立て委く云のこ其の此のこ諸此こ素戔嗚尊對曰吾
件こ引て云事ふればふりの元無黒心と云文ハ古事記の啓者無異心と有て其ハ
異らざれども但父母有嚴勅と有ハ違ふ可し此ハ上
章の故其父母ニ神勅素戔嗚尊汝甚無道不可以君臨
宇宙固當遠適之於根國矣遂逐之より兼たる所ハ
有れども其ハ素より傳の誤る事此卷首ハ出せる
が如し其ハ此章首ハ伊弉諾尊のこの結有て伊弉册
尊の結無さハ上章ハ根國ハ入坐し御事を云ふ任
ぬたるを不意く此ハ至りて然出たるハ文章の上の
違へるふて其正実ハ素戔嗚尊ハ天下を依奉せ給

へるハ父母ニ神ハ係り此神逐の御事ハ伊弉册尊の
罷坐し後ハ其慕奉せ給へるハ起れるハ必伊
弉諾尊の御所置ふて有ふれば此一事ハ於てハ右ハ
引る古事記の趣ふじ良ハりける然れども其記
素戔嗚尊の御生坐る御事を御身ハ依て坐出坐る
由ハ傳たるハ上章第六一書ハも有る事ハれども此
ハ誤ら何方迄ハニ挂り右の己有嚴勅より以下ハ古
御祖神の珍子等ハ坐り事記ハ唯古語の仕ハ傳はりて文の狀も何も甚愛た
くて宜しきを此ハ勉めて漢風ハ泥まれこりつる故
ハ其意ハ然しも異らざりけれども此を訓じ時ハ語
ハ古ハ言ハ有れども續けがらハ漢字を譯せるが如き

所のこ多くて聞善能くも侍ゆりめふや若然者將何以明
尔之赤心也より以下ハ古事記と共小異なる事無し然
れども其記ハ各字氣比而生子と耳有て此御誓ふ
殊小專要と有る大事を漏たり其ハ如吾所生是女
者則可以為有清濁心若是男者則可以為有清心の文ふ
り是無くハ何を以て御誓の信を頭ハさよし此事
第一一書より始て下章第三一書小至るまで皆同ト
事ふて正定ふる古傳ふる者ふり此第三一書小其素
彥尊所生之兒皆己男矣故日神方知素彥鳴尊元有赤
心と有て此の結未甚明ふじ妙明小奇く靈きまで相合へりけ

るふむ此御紀の賜物ハ有ける古事記ハ先此
未小至りて尔速須佐之男命自于天照太御神我心清
明故我所生之子得子弱女此言者自我勝云而有
ハ何の爲がや先小各字氣比而生子と云所其勝負
を男と女と何れ立る所就て云ずしてハ女
を得て勝とも男を得て勝とも ○素彥鳴尊對の上小於
争でりハ云事を得む徒事ふり 是待マ云語を訓問加ふ可し古事記ハ何故上来の下小
尔速須佐之男命答白と有と同ト移の文ふる所ふれ
バふり ○對曰ハ洲起元章第一一書小己小在り此小
てハ美許多閑申志給波久と訓べし紀中答をも報を
も被用たる事常の如くふる小此字の相向合る所小
遣ハれハるふり万葉六二十丁小山彦乃將應極十六小

△上ハ云云素小前
 借
 △二書小は於是日神
 方知素多鳴尊
 無惡意と見え又
 弟

不答尔勿喚動曾又丁十八 ①山彦乃答響音萬田丁十七
 小誰彼登問者將答十三丁十五 小立留何常問者答遣田
 付乎不知ふど有て此ハ然しも奇珍うごごる事小
 ハ非れども右の答響コウキョウの字を以考る小布流布礼の活
 機ハ振字ハ本よりの事小して郷音ふでの義も有る事
 見ゆ此ハ萬小直る事ふり戀ふる恐ぶるふど是ふ
久ても許多布とも牟加布とも多具此とも加佐奴とも
も加多伎とも阿多流とも於母布とも阿布とも見ゆ
 ○吾ハ阿礼と訓べ小夜都加礼と訓たれども良
 ハうごごる由上六 小云り下皆此小儼ふ可一 ○元
弟書小元無惡意と有依て
 ハ母登與理と訓べ△此ハ波自米と訓附たれども第

三、一書小故日神方知素多鳴尊元有赤心モトヨリと有る此を
 母登と訓たるを初として元をも本をも相通ハ一書
 の中小神武天皇御紀小饒速日命本知天神モトヨリ慇懃云ニ
 天皇素聞饒速日命是自天降者而云ニふと有る類ハ
 共小母登と云べき所ふり本の字ふてハ有けれども
 天孫降臨章弟五、一書小我知本是吾兒ハシメヨリ但一夜而有身ハシメヨリ
 慮有疑者云々と有が如く其事の起初る時よりの義
 ふる小ハ波自米與理と訓べ小此所の如く小其事の
 起初ハ措きて其本来ウキカタチより係て云小ハ母登與理と訓
 べ小是其差別ふり各義抄小元を母登とも波自牟とも
も意富伎尔とも波牟とも訓こ



△又下小濁心と清心とを相並べ云をも考合す可し猶
此の文体履仲天皇御紀太子疑弟王之心而不察時瑞齒別皇子合詞曰僕無黑心唯怨太子不在而参起耳と有る似たり若て此言

元ニを波自米袁波自米登斯とも訓て大元同ト義ふれども漢籍子華子列子淮南子ふどふも太素太初と分て云る如き差異彼
○黒心ハ伎多那伎心と訓り此
小吾元無黒心と有を結びて知素茂鳴尊元有赤心と有り△第一一書小も吾元無悪心と見え古事記小も僕者無邪心と見えたり△大殿祭詞小ハ已耶ニ不令在邪意穢心無久と有ふて此ハ唯清き小對云ふふれども此の黒心を悪心とも書れたる字面ハ律小詔ゆるハ虐の名目小依て書れたりと見ゆ其ハ上章小汝甚無道と有ハ律の第五不道と云小當りれ此の悪心ハ弟四惡逆と云小象りて書れたる者ふり其ハ下小引く

文を以曉る可し伎多那伎ハ右の如く黒をも悪をも濁をも穢をも書て其言ハ同じき物うり所小依て字を以て其章義をも知りてたる者ふり纂疏小陽清陰濁故赤爲清黒爲濁也譬猶佛書善業爲白業惡業爲黒業也と有が如く通證小右文を引て今按金葉集云花染古耶奴流人乃奈可利介留阿那腹黒乃君我心也帛草紙亦云腹黒之事蓋謂黒心也云云如く中昔小多く心の倭けたるを腹黒と云ひ又源氏螢卷小继母の腹穢き云く續紀第十九詔小天云語有て此ハ常小も云語ふり
日嗣高御座次乎加藤 奪將盜止 爲而惡逆キタナクサカマナル 在奴久奈多夫礼麻度比奈良麻呂古麻呂等伊云て此逆在惡奴等者頭出而云く二十八詔小逆仁穢岐 奴仲末呂伊詐 奸流心乎以天兵乎發朝庭乎傾動武止 云く此乎見流仲末呂可心乃逆仁惡狀 方知奴 云く三十三詔小逆惡

伎仲末呂止同心天朝廷予勤之頃無謀天在人仁在三
十四詔小逆心乎以天朝廷予勤頃止之兵予備流時仁
三十五詔小此奴等毛如是久逆穢心乎發天在計利既
明仁知奴四十三詔小岐多奈久惡奴止母相結且謀良家
久頃奉朝廷乱國家且云々其等我穢久謀且爲留壓魁
事皆悉發覺奴云々四十四詔小心中惡久垢久濁天在
人波必天地現之示給留物曾云復清麻呂等波奉侍
留奴止所念天已曾姓毛賜且治賜之可今波穢奴止之退給
尔依奈云々其我名波穢麻呂止給比云々四十五詔小
帝乃尊岐宝位乎望求米人乎伊射奈比惡久穢心乎以

天逆尔在謀乎起ふ有る何れも律小謂ゆるハ虐の
類小當て伎多那伎ハ云る者ふり天武天皇御紀小
近臣群臣元有謀心ナキ必害天下ト有る謀をも伎多那伎
割来れるを以て曉る可く右等ハ一日謀反又曰大
律小謂謀危國家ト有り二曰謀大逆律小謂謀毀山陵
及宮闕ト有り三曰謀叛律小謂謀背國從偽ト有り四
曰惡逆律小謂毆及謀殺祖父母父母殺伯叔父姑兄弟
外祖父母夫婦之父母ト有て何れも謀字有ハ右の
御紀小合るを思ふ可き者ふり借此ハ日神の疑ひ所
思く看す御方小取てハ右小謂ゆる惡逆ト云ふも近

△釋秘訓凡父母兄弟正相面對則皆加命辭一部之例皆同と見えざる私記の説の如し

しが故ふ此ふハ黒字次ハ惡字を書れて其趣を令
知給へる事ハ有れども皆律に依れる文法にて甚
ニ味氣無キ御事ふる者上章ふる無道ハ五曰不
故令國內人民多以矢折復使青山變枯と有る律謂
殺一家非死罪三人上支解人造畜盡毒壓魅若毆告云甲
有ハ當て阿邊伎那伎と云ふ古言ハ無道の字ハ書
れたる者ふて此ハ律令の御定有て後の文法ふるを
思合す可○父母ハ加叙伊呂彼能尊と訓るハ後ふ可
キ者ふり
し其事傳ル九丁ふ云り△借此ふ父母と並べ擧る事甚
ニ大ふる誤みて傳ル九丁ふも且ニ説るが如く素戔
鳴尊ハ天下を事依し授賜へりしハ宴ハ父母ニ神の
勅任ハ因れる事申すも更ふり若く此大神の御幼稚

小渡し給ふ御間ハ伊弉册尊ハ大神を生給ひて後
直ハ黄泉國ハ入坐りしハ一向ハ戀泣せさせ給ひ
けりハ追て幸行しハ伊弉諾尊の還り御在し坐著て
後ハ神逐ハせ給へるふれハ上章第六一書古事記の
傳カふむ宜しかりけるを此章首も然る事ふて既ハ
伊弉册尊の罷入坐し御事ハ一書ハ任ねて伊弉諾尊
一柱の惣括ふるをも思ふ可くふむ有ける○嚴勅ハ
ハ上ハ天父母既任諸子各有其境と宣へるを返して
申給へるふり上章第六一書ハ吾欲從母於根國唯為泣耳
伊弉諾尊亞之曰可以任情行矣乃逐之と有る其を兼

て此章首小吾今奉教將就根國故欲暫向高天原與姊
 相見而後永退矣^上勅許之と有る此乃謂ゆる父母已有
 嚴勅と云る者ふり但右の文ハ上章の終より於是々
 美たる所ふてハ有れども文意の粗糅有か爲右の
 如く目易く文を合せてたる者ふり其ハ此神逐の御事
 を父母ニ神ハ係れ
 るハ如何ふる傳の有ても皆誤ふて伊都
 諾尊一神の御所置ふる事件と云るが如く嚴ハ伊都
 久志伎ハ嚴重ふる義ふて濁りて清淨ふる事小云ふ
 伊豆とハ異ふり思混ふ可うと云ふ此伊都ハ上百二十
 六丁
 小註せる稜威小同くくして氣衝^{イキツキ}如の義ふり同く言
 ふぐく物を愛傳^{メテカシ}つく状ふるを伊都久志年と云るハ

合万葉五二下天皇
 神能伊都久志年
 國と有る神の御事
 の嚴重なる由あり
 聖異記ハ儼然
 と伊都久志年
 と訓ミ中古の物
 語書かどハ伊都
 久斯又ハ伊都加斯
 と有るど何れも
 嚴重の義ハ注セ
 〇將永乾手根國ハ上
 吾今奉教將就根
 國ハ次ハ與姊相見
 而後永退矣云々
 其ニを合せて此ハ如
 此申給ふる者あり
 ▲傳世一卷七百十
 丁ハ注るが如く

宇都久志年の轉ふて心衝染^{ウツキシム}の義ふれば心小染徹り
 て愛^トかききを云ふれば其も別ふり思混ふ可うと云
 然れハ嚴勅ハ畏命^{カレキキコト}と云ふ同くうる可く古語拾遺ハ
 も或兼皇天之嚴命と有て其訓も此嚴勅小異ふと云
 通證ハ今按嚴一訓ハ伊豆加之見齋明天皇御紀忌檀城
 之義也と云るハ何の事や嚴神之宮と云事有て其
 ハ出雲大神の甚可畏き神ハ御在り坐小就て然赫し
 奉れるふくく有けれ忌檀城ハ更小由無く又説文
 小嚴教命急也と云〇如を母斯々訓ハ次ふる若字ハ
 ども然り言義ハ亦其ふる可くして此事を打置て其
 外を免ぶむ意ふり万葉十九三十四丁小君之往若久尔有
 娑云〇不與姊相見ハ上小御父大神の勅許を請奉

くせ給へる御言小暫向高天原與姊相見而後永退矣
て申給へり御言を申演させ給へるふり故弟一
書小ハ唯欲與姊相見唯爲暫来耳と有り弟二一書小
ハ吾所以来者実欲與姊相見云不敬別有意也と見え下章弟三
書小ハ天小參上給へる事の二度見えたる其初ふる
小如何不與我姊相見而擅自徑去歟とも有が如く此
ハ実小日神を仰ぎ敬奉らせ給ふ御心の至を申奉
せ給へる所ふるふり如此く御崇敬の御事ハ卑奉る
ふ及ばず御兄弟の御親しきこ
へ深く御在り坐ての御事ハ有れども神性の雄健
く一速く坐が故小御心より外ふる事小日神の驚
ばうせ給ふふり及○吾何云ニハ右小引る下章弟三
者ありり

書小如何云々歟と有る同づく甚く其言小カを入れ
慨かいて云語小常小在る事ふり續紀第三十三詔小何
曾此人乎復立無念無ふて有て古語ふも多き格ふり
○敢忝ハ敢兵麻加良牟と訓り○雲霧ハ謂ゆる天浮
橋の事ふり其ハ八洲起元章の天浮橋を其弟二一書
小ハ二神立于天霧之中と見え弟三一書小ハ二神坐
于高天原と有て一ハ狹霧一ハ虚天ふり又四神出生
章小ハ日神を天上小舉奉らせ給へる其小ハ天柱と
有て風氣ふる事各件との傳小就て委しく注せるが
如く若て天孫降臨章小ハ排分天八重雲稜威之道別

道別而天降云々有て次ハ則自穗日ニ上天浮橋
立於浮渚在平處と見えたる此ふる則ハ天八重雲よ
り兼たる者ふして其則天浮橋と云物ふる事を知せ
たる文ふり如此く神等の登降し給ふ物ふるが其器
と成して云時ハ天浮橋又天柱又ハ天梯立とも云ふ
事ハ有れども其物実を以てハ雲とも霧とも又合
せて此の如くハ雲霧とも云ふ事ふして有けり其
く事ハ傳六卷七卷ハ所ハ狹き迄注せる事ハ有
れども此ハ雲霧と云が甚く異ふる物の如くも聞ゆ
ゆるが故ハ又此所○跋渉の涉ハ陟字の義ハ見て跋
能煩理氏と訓へハ雲霧ハ布牟と云事ハ万葉十九
十三

三小天雲乎富呂尔布美安多之鳴神毛と見え仁明天
皇御紀奉賀四十室筭長歌ハ苗刺天照國乃日宮乃聖
乃御子曾飄葛乃天乃梯立踐歩美天降坐之と有る天
乃梯立ハ右ハ引る天孫降臨章ハ謂ゆる天浮橋ふて
其実即天八重雲ふる事を知べし又涉字ハ詩廊風ハ
大夫跋渉と有を取て書れたるハ有れども涉ふて
ハ和多流ふて叶ハず名義拙ハ涉ハ多加斯と云訓有
れども能煩流ハ訓べきハ非ず此を以て姑く陟字
の義を以て訓べしと云ふり上ハ乃昇詣之於天也
と有り次ハ始素戔嗚尊昇天之時と有り第一書ハ

及^ニ其上至^リと見え下章第三一書ハ扇天扇國上詣^テ天
 ふ^レでも所見たれバ必^ズも能煩流^ト云^フハ甚^ク事實
 ふ^レ乖ける者ふり加以万葉ニ^ニ長歌一云^フ天雲之
 八重雲別而神下座奉^ス之も有^テ下^ニ天原石門乎閑神
 登座尔之可婆^ク有り常^ニも雲居^ル昇^ルふと云^フが如^ク
 雲霧ハ能煩流^ト云^フ方似着^ハうりつれば今和多
 流^トハ訓^ズるふり陟^ハ尚書^ハ黜陟^ニ在帝^之左右^ト有
 て名義^ハ抄^ハ能煩流^トも多加斯^トも訓^ズる字^ハふり^ハ通證^ハ
 の詩^ト引^テ傳^ハ草行^ハ跋水行^ハ跋^ト書^ハ文選^注ハ自
 膝^{以上}涉水^也と云^フ事^も有^レれども此^ハ跋^ハ歩^ハて^ハ叶
 ハ^レざる事^ハ右^ハ云^フる^ハ如^ク且^ハ和^多流^ハ横^ハ行^ハく^ハこ
 る^ハ云^フへ^レ上方^ハ進^ム事^ハ然^ル云^フる^ハ例^外ハ且^テも見^當

所無^リけ^レ者^ヲや^ハ○遠自^ハ天地^ノ相放^レる事^ノ遐^スる^ヲ
 以^テ宣^ヘる^ハふり四神^ノ出生^ハ章^ハ天地^ノ相去^ハ未^ダ遠^ク有^レガ如
 く天地^ハ相聯^ルる者^ハ有^レれども漸次^ハ放^リて遐^ス
 う^ハ成^レれる^ヲ以^テふり^ハ儲^遠と云^フ事^ハ經^ハも緯^ハも古^ハ
 ふも後代^ハも遍^ク云^フ語^ハて經^トハ右^ノ天地^ノ相去^ハ未^ダ
 遠^スハ固^ニ當^テ遠^適之^ハ於^テ根^國と有^ル類^ハふり緯^トハ近^飛
 鳥^ハ對^ヘて遠^飛鳥^ハ近^江國^ハ對^ヘて遠^江國^ト云^フ
 類^ハ是^ハふり古^音ハ遠^津御代^ハ遠^皇祖^ハ遠^津神^ト
 祖^ハふ^レ是^ハふり後^代ハ万^葉三^ニ十^ハ小^遐代^ハ神^左備^ト
 將^行幸^處九^三十^ハ小^永代^ハ標^將爲^跡遐^代ハ語^將純

△口訣ハ跋^ハ脛^ハ行^ハ艱^ハ
 涉^ハ徒^ハ渡^ハ水^也云^フ
 踏^越て昇^天雲^霧を
 御^事少^少も縁^無
 く^テ唯^其字^ヲ
 注^スる^ハ此^ハ
 更^ハ要^無
 △遠^自來^參と申^ス
 給^ヘる^ハ意^ハ事^記
 八^十神^ノ御^歌
 登^富登^富斯^ト
 宣^ヒて遠^ハ沼^河
 比^賣を^見御^在
 一^ハ坐^{ける}御^心の^源
 一^ヲを^知り^給へ^ル
 と^等しく^此と^其
 赤^心を^以て^參向^ハ
 せ^給へ^ル意^味を^こ
 述^スせ^給へ^ル事^ハ
 今^世の^俗言^ハの^上
 一^ハ却^リて^此格^ハ
 有^ル事^ハ多^ク傳^三
 十^九百^ハ云^フ
 若^テ此

○日本書紀傳五

○百七十二

今、諸或説、小遠者、
自淡路國、参、朝、奈、和、
國也、云、云、ふ、じ、八、
小、僻、ニ、シ、テ、安、説、小、
て、神、代、の、古、小、疎、く、
説、ふ、る、者、

跡ふと有る類ハ後世後代と云ひが如く又經緯と古
今とを合せて万葉ニ三十三小天地之弥遠長久六十五
小天地之遠我如日月之長我如ふどの遠ハ天地の常
在ふると世代の久しきを兼て云る者ふり故遠ハ處
經ふて我居地ウレトヨと當今タトイマとを本立ホトタテして其至り經る彼
方を云語ふる者ふり又其小對へる迹ハ聯處レノカの義ふ
る可き事をも併せて思ふ可き者ふり名義枚小遠を
流とも佐加流とも見え退も右ウ同ドウく登富斯トモとも佐
佐久とも佐加流とも波流加那理ナとも阿曾夫アソとも有
り○来参ハ麻草伎都マクサキツと訓べく上小至間来詣之狀と
所見たる来詣キミ同ドウく事其下コト五丁イチノエ小云るが如く本

小ハ唯小伎都キツとの訓れども言足はず○阿姊アサハ上
小與姊相見而後永退矣と有く姊アサ同ドウく共小那泥
能美許登と訓べく阿字ア小泥ニて言を立タテべく通
小李高隱詩階前逢阿姊類書纂要曰民俗稱久皆以阿
字居首助語辞也ア有ア然ニれハ也ハ此コノ語コトハ全小用
無ク江家次第エを見ミ上ウ卿ノの公事コト小就スて人ヒトを呼ヨぶ
阿誰アと云イる阿ア此コノ似ニたりハ雖モ其コノ人ヒトを指サす
彼カ何ニ某ニと都鄙ツ共ニ云イ事コト小其コノ人ヒトを指サす
倍理氏ヘと訓べく八洲ヤチ起元章キゲン小如何婦人ニ反先言ニと
有アり續紀シ弟四十三詔ニ然ニ流物ニ反天逆心ニ乎抱藏ニ
己ニ為首ニふハも有アる反ニ同ドウく我ニと人ヒトと意用ニひの
違ヒたる時トキふハむヒる語コトふるハり其コノ素戔鳴尊ニハ元

ぐり思き心も何も御在り坐ざりけるを天照太神の
 巖顔ミイカリ不遇奉らせ給ひける事の御意より外ふりけれ
 ば然候ミイカリ申させ給へるふり各義抄不翻を翻也とも有て加倍須とも此流賀
 倍流とも有り借此言漢文ふ多く反語ふ用たれ古言ふハ少ク耳有り○起巖顔ハ引
 合てて美伊加理坐二年登波と訓べし纂疏不巖顔怒
 色也と説せ給へるが如く此言義上章第十一書忿
 然作色の下ふ云り傳十四九十見る可く此字文選不
 巖顔和而悦懌有を取れたるが古語拾遺不天照
 太神赫怒云こと有て下ふ今世内侍善言美詞和君
 臣間令宸襟悦懌也云事有て信不巖顔悦懌ハ

反對ふる言ふり故此ふてハ素戔嗚尊の御心ハ遠
 くより参来つる事を悦懌び所思省べきふ反りて
 巖顔不遇奉らせ給ふ事の轉有る由を奏し聞えさせ
 給へる御言ふり併み己尊の神性の雄健く御在
 り坐ふ依て天ふ昇給へる事の競凌り坐ふ依て然る
 御巖顔を起させ御在り坐ハ御心著せ御在り坐ざ
 りけるふ或説不素尊欲與阿勢相見而後永退其
 其意忽變發侵凌之情此以無所畏敬也過日神之威巖
 爲之所化暴心洋融即言曰吾元無黒心貴哉言乎と云
 るハ何事初昇天の事を御父大神小請奉らせ給
 へるハ妙尊御許を賜りて罷坐むとの御心ふて
 始終共其御心替りて給ハざるふり然る小見父之
 長隱其意忽變と云れ此章首不於是と有て其勅

許を請給ふ所ふり次は是後伊弉諾尊云々有ハ素
戔鳴尊の天小升坐る後の事ふり故立復りて始素戔
鳴尊昇天之時云々有て此始ハ先是と云義ふる事
熟々上文を讀度して知べく何ぞ神父大神の長隱を
待し侵凌の情を發し給ハむ此ハ予が素戔鳴尊の御
爲ハ許さざる所ふり上古より以來此一章小於てハ
一人ハ其蹟を探りて説○不意ハ於母波邪理祁理
得たる人ハ非とぞ思ふを由久理那久マ訓る其ハ不用意小して其所小至れ
登白給布マ訓附く可く不意ハ上章第六一書小不意
を由久理那久マ訓る其ハ不用意小して其所小至れ
るを云由傳十百六丁小註せるが如く此の不意ハ然ハ
思懸懸させ給ハざりゆる由小て少悔給ふ意も有小ヤ
万葉四三丁小從情毛吾者不念寸山河毛隔莫國如是
戀常羽入從情毛我者不念寸又更吾故郷亦將還來者

十一ニ丁小現毛夢毛吾者不思寸振有公尔此間將會
十羽ふが於母波邪理伎マ詠る何れも此の不意マ同
く用格ふり○古事記ハ此迄の事を尔速須佐之男
命答白僕者無邪心唯大御神之命以問賜僕之哭伊佐
知流之事故白都良久僕欲往妣國以哭尔大御神詔汝
者不可在此國而神夜良比夜良比賜故以為請將罷之住
狀參上耳無異心マ見えたる僕者無邪心ハ此小吾元
無黒心マ有る是ふて此言ハ第一一書より始て次ニ
此事の出たる所ニ共小悉く然る意味見えたるれハ更
小混ふ可き所無し唯大御神之命以ハ此小但父母也

有嚴勅と云と同し事なれども父母と有ハ誤ふる事
上ハ辨たる如くふれハ彼記を以て是とす次ハ問賜
僕之哭伊佐知流之事云々ハ上章第六一書ハ故伊弉
諾尊問之曰汝何故恒啼如此耶對曰吾欲從母於根國
只為泣耳伊弉諾尊惡之曰可以任情行矣乃逐之有
不同とざるを此ハ其事無さハ此神逐の御政をバ父
母ニ神の御事と爲るより誤りたりし者なり此一
條ハ
於てハ古事記と右の一書ハ實ハ正實の真旨を傳
たりし者にて此正書ハ甚く勝れる所有る者ハ不
け有此諸此章首ハ於是素戔嗚尊請曰吾今奉教將就根
國故欲暫向高天原與姊相見而後永退無勅許之と有

ハ古事記ハ勝りて甚愛たり傳ふる事上ハ己ハ云
るが如く彼記ハ右の被逐坐し所ハ故於是速須佐
之男命言然者請天照太御神將罷乃參上天と有て此
ふてハ私の御所出立爲ふるハ此ふてハ御父大神の勅許
を奉らせ給へれハ公行ふる者なり此ハ必此の如く
無てハ叶ハざる所ふる事上ハ己ハ條々述たるが如
く次ハ古事記ハ以為請將罷往之狀參上耳と有を此
ハ將永就乎根國云々と有て文の体も大ハ叢勝し
けれハ此ハ彼麓さ方や心深かりふ但其委しきハ
就てハ又大ハ
其趣を考ふる便且と成て一向ハ棄べりし取べき
は者ふれハ唯其語の一途ありざるを不足ぬ事ハ

思ふの無異心ハ第一一書ハ不敢別有意也ハ申給へ
 る小同しく信ニ素戔嗚尊の御本意是ふり此時の事
 ハ古語拾遺ニも於是素戔嗚神欲奉辭マカシマシ日神昇天之時
 とも有て御辭見ニ參上り坐ふころ有けれ別ふる御
 意坐るふくざりけれハ始ふハ吾元無異心と宣ひ此
 小ても其意を復して無異心と深く其御言ハカを入
 て然申させ給ふ可き御事ハふむ有ける記傳七十四
 小異心ハ氣志伎心と訓べし万葉十四ニ丁小家思吉
 己許呂乎安我毛波奈久尔十五丁小之可礼掃毛異情
 乎安我毛波奈久尔又ニ丁家之伎許己呂乎安我毛波

奈久尔と有り此異心の訓も相照して知べし借始ハ
 無邪心と白して又此ハ無異心と申給ふハ今言つ
 る事の由の外ハ別意趣ハ無くとふりと所見ハるを
 も相照して考合す可し異字を禰と訓ひハ猶十一小
 心點我念と有も右の例ハ
 て心毛禰ハと訓べし所ハ有るハ十六小寒水之心毛
 計夜尔所念音之少寸と有も心毛異夜尔ハ右小同
 ト十小鳥音異鳴秋過良之十三小情有鳧常從異鳴ハ
 何れも異を禰と訓ひ所ハ有るハバ異を禰志伎ハハ必
 云ハバハ復問曰ハ先ハ詰問ハせさせ給へるハ素戔
 所ハ復問曰ハ先ハ詰問ハせさせ給へるハ素戔
 鳴尊條ニ小して御對申し給ひけるハ依て疑ひ所思
 看す大御心ハ晴させ御在り坐つれとも猶其虚実を
 定させ給ハむ慥ふる證據の事を仰せ給ふことして復

四傳十七卷三十七下
其事云云考考可

再問ハせさせ給へるふて先ふると後ふると其問く
給へる狀の別異ふるを明されたる所ふり弟二一書
此の如く起兵詰問と有て次
ふ天照太神復問曰汝言虚実將何以為驗と有を以て
曉りぬる。○然者ハ古事記ふも然者汝心之清明何
以知と有り然者ハ其白給へる御言を兼て其事を正
し給へるふり。○將ハ當をも方をも適をも正をも共
小麻佐尔と訓む事ふて麻佐ハ真其ふり其指了所の
事物を慥小其と極むる辞ふるふり万葉二十三小益
為尔知而我二人宿之十一十三小占正謂妹相依十三
九小正目君乎相見天者社ふど有る類是ふり又此所

三丁六小梓弓末者
師不知雖然真坂
者君尔縁西物乎
又丁何時之真坂
毛常中亦所忘十

を瀬ふして麻佐加と云語多し正處マカの義ふる可し十
四丁十一小安我古非波麻左杵毛可奈思又二十麻左可
許曾比等目乎於保美奈乎波思尔於家禮十八丁十八小
伊末能麻左可母宇流波之美須礼ふど有る思ふり此
麻佐も亦右の例ふて常小語の上小或ハ真或ハ獲カて
云を正の一語ふ成せる者ふり源氏繪合卷小甚加
正無さまで古の墨書
の上乎も跡を闇う成しつ可きめるハ云ニと有も尋
常ふりぬ奇しく目覺しきを云り又下小ハ異し
ぬ業とも云り麻佐の反小麻
佐那志と云を合セ考ふ可し。○何以ハ正しき何の證
據を以て明しめ給はむとふり然れば古事記ふ何以
知を記傳ふ伊加尔斯氏と訓れたる其も然る事ふハ

有れども此ハ那尔袁母氏と訓む方勝れるふる可し
○爾ハ上章第十一、一書小も有て伊麻斯と訓つ弟一
一書小若汝心明浄云ニ古事記小も汝心之清明云ニ
と有て爾も汝も一ふり○赤心ハ此ふるも弟二一書
第三一書ふるも共小赤を伎與伎と訓る成不ぞ上小
黒心キメキコロと有る對ふハ実不然訓べき所ふりと雖も弟一
一書小汝心明浄と有ハ阿加伎ニ與伎と訓べく下章
弟三一書小清心と有ハ素より伎與伎と訓む所ふれ
ハ赤をも然訓てハ其差別無が如く仲哀天皇八年御
紀小朕聞汝熊罴者有明心以參来敏達天皇十年御紀

小子ニ孫ニ用清明心事奉天闕ふで見え續紀第一、詔
小明伎浄支直支誠之心以而弟二詔小以明浄心而弟
五詔小汝等清支明支正支直支心以弟七詔小浄伎明
心乎持豆第十七詔小以明清心皇朝乎助仕奉弟二十
詔小以清明心仕奉云ニ以明直心仕奉朝廷止詔弟二
十八詔小明久浄岐心以天弟三十一詔小明仁貞岐心
乎以天弟四十四詔小己何心乎明尔清久貞尔謹天不
が猶多在るが清きと明とを別ふ云るを以て打乱る
可くゞざるを曉る可し記傳小引れたる万葉十五二十
丁小安我己許吕安可志能宇良尔と續け又二十
一五丁

△遷却崇神詞ハ
見明物止鏡ハ有
ハ鏡ハ顔を移し
見て知る故ハ然云
ふり又

小加久佐波奴安加吉許己呂乎ふど有る如く心の隈
こゝき所無きを云ふり右小引る古事記ハ無異心マ
申させ給へる故ハ然るバ其隈無き心や如何ハ問
給へるふれば赤心アカキコハ甚克合へる者ふり通證ハ赤
誠也所謂腹赤ハ赤心也當對腹黒者後漢
光武紀推赤心置入腹中と云るハ実ハ然る事共ふり
○明ハ阿伎良米麻志登詔給比伎と訓べし明ハ古事
記ハ然者汝心之清明何以知と見えたる知小同ト其
公万葉十八二十丁小金有等麻宇之多麻敬礼、御心乎安
吉良米多麻比十九二十丁小許能久礼敏奈思乎見明良米
情也良年等又三十九丁杖花之我色ニ尔見賜明米多麻比

△可ハ齋明天皇等
御紀ハ野田蝦夷恩
賀ガ折言言ハ若爲
官軍備了矢野田
浦神知兵と有り
又天武天皇八年御
紀神子等の盟ハ
天神地祇及天皇
證也ハ有る證を
阿伎良米多麻志
有て此を知證同
ハ用様ふるを知

又色別尔見之明良年流今日之貴左二十二十丁小母能
其等尔佐可由流等伎登賣之多麻比安伎良米多麻比
又五十九丁可久之許曾賣之安伎良米晚ふど目小見て心
小識す事を然云るを以て明と知と異ふとざる意味
有を曉る△可ハ著明を志流ハと云も明ク小爲る事ハ
在り又證徴を阿加志ハと云も事を明ク小成すハ
志流志ふと云を思ふ可し○請ハ上章第六一書ハ請
勿視之と有ふとハ上の請曰と共小麻哀須と訓べし
所ふり然れども此ふる又弟二一書ハ對曰請吾與卿
共立折言約と有ふとハ麻哀須と訓てハ對日ハの曰ハ重
復りて如何ふり又徒ハ捨て訓ざるも遺憾ケリつれ

ハ許比麻都良久波と訓つ其ハ希望をも庶幾をも尚
をも比翼をも慕をも覬覦をも共ハ許比祢賀波久婆と
訓て語の初て置て物を詔ふる義ふると同例ふる
を以ふり顕宗天皇三年御紀ハ若依請^{スレ}敵^カ我曾^カ福慶云
ニ依神^カ献田十四所と有ふでの請又乞是ふり○與
姉ハ那泥能美許登と訓べき事上^{十三}ハ註るが如く
然れども其も尊長を云称して有ければ姉字ハ正し
く當れる訓ハ非るふり斯れば此ハ古書ハ多く汝
命と云語の有る其ハ依て與汝の意ハ訓べく所思
えたる其ハ右ハ明爾之赤心也と有る爾ハ對申給へ

る御言ハ在ればふり古語拾遺又古事記ハ諸神の日
神^{ミコト}ハ啓曰ハ汝命と申奉れるふと敬詞ふるが故ふり
同記ハ貴御子等御事依の所ハ汝命者所知云ニ矣事
依也と三有も御子ふり取別て崇奉らせ給へる者
ふり記傳七^五ハ汝命ハ那賀美許登と訓べく賀^ハ之^ハ
ふり續紀第十四詔ハ伊夜嗣^ル奈賀御命聞者^止勅^天
又武内宿祢歌ハ大雀命を指奉て那賀美古とも詠る
此等ハ依れり後世ハ汝と云ハ界^ハめたる称ふれ
ばも上代ハ尊む人をも云り故命とも云ふり白
檮原宮殿ハ神沼河耳命御兄を指て那泥汝命とも詔

ひ大忌神詞ふ山口坐神を汝命と詔給へる事見ふ
有か如く然れば尊長の義ふれども字に依て人皆那泥の事
と心得めれども右の那泥汝命の如きハ兄を云ふれ
ハ那泥ハ嫌ハハ非るふり然れば汝命と訓りて誤
らハ云べ○共誓言ハ共尔誓言爲年と訓べ古事記ハ各
字氣比而々有と同一事ふり第一書ハ日神共素戔
鳴尊相對而立誓言第二書ハ吾與姊共立誓約第三一
書ハ日神與素戔鳴尊云々相對乃立誓約古語拾遺ハ
も仍共約誓言有て共誓言と云事ハ於て異ふず諸共誓言
云事此章の眼月目ふる可し其ハ上百五十ハも粗云る
か如く此時の御誓言ハ素戔鳴尊ころハ日神ハ疑れ

せ奉給へれば御一方ふて如何なる御誓をも立させ
御在し坐てキケキコロケニキコロ黒心異心の元より御在し坐ざりし御事
を何方迄も證し奉らせ給ふ可き御事ふるハ其疑れ
奉給へる御方より却て共誓言び給ひし事を請奉ら
せ給ひ然のいふず日神も其を許諾し容給ひて最
前ハ御誓言の御事ハ及ませ御在し坐し御消息ハ就て
ハ殊ハ心を深めて考ふ可き所有るふり記傳七卷
誓ハ唯須佐之男命の御心の清明を顕ハさむ爲ふ
ハ大御神も諸共ハ誓給ふハ如何と問ハ答けし此
事後世の心を以見れば疑ハしけハ上代ハハ如是
ハ類の誓ハ凡て其疑ふ人も疑ハし人ハ共ハ誓言ハ
ハ定れる事ふりけひハ云れたるも今ハ落著
ラご説ふり又通證の一説ハ共字當具眼誓約之所

主在皇嗣若唯爲無叛意之誓則何故日神與之共立誓乎又何以生子爲清濁之證乎云云ハ猶以心得ず此時素戔嗚尊の上天給へる元々皇嗣の事を以て誓を立給ひ又日神の御上も皇嗣の事然計り御心の御在坐ふむハ右の如く事及給ふも及ぶ者及ぶ者又詰問ふの御事云ふも足ざる僻説ふり然共小誓給ひ事を請奉るに給へるハ元より黒心異心の御在坐ざるが爲小其疑ハせ給ふ日神の御方其大御心必善心ふとと所思詰給ふ御事の然るや否やを定めさせ給はむ事を請奉るに給へるふり然して後小己が黒心異心の御在坐ざる程をも誓ひ願ひ申さむとふり斯在れば此ハ二神相共小各其御誓の御事

至らせ給はずしてハ竟る無き物争がひ云事小成ほ終小盡る世有まじりければふり此ふて素戔嗚尊の赤心小御在坐御事をも知べく又共誓を請奉るに給へる事情をも想像奉る可くふむ有ける但疑ハれ奉る小依て其赤心を明さむ爲小誓を爲る事ハ天孫降臨章小鹿葦津姫の一夜小して娠給へる事を皇孫尊の信給はず疑給ふ小因て故忿恨乃作無戸室入居其内而誓之曰妾所娠若非天孫之胤必當齧滅如實天孫之胤大不能害即放火燒室と有る此ハ疑給ふ皇孫尊も共誓給ふ御事無さハ第五一書ふる御答我知本是吾兒云くと有が如く御心中定りての事ふれば此の例小非ず但然赤心ハ御在坐も其神性の雄健く御在坐つるが故小其御疑小遇奉るに給へるも言以て行けば此小共誓給ふ

御事小至れる運ふて其事の極小及びてハ日神と此
神と二柱の御中小天津日継所知者了可き皇太子を
生奉りて給ふ御事小成て先小伊弉諾伊弉冉二大神
の何不生天下之主者歟と宣給ひて生坐る二御子の
中小日神ハ天上を所知食し此神ハ地下小入御在し
坐了御事小成ても此頭國ハ無主キミナキの空國ソラノクニハ成ずし
て二柱御祖神の所思し坐し御心の如く成整へる事
全く天地を預鑄造給ふ皇祖天神の御靈小資れる者
かり其二柱神共小此小誓給へる其證ミコトを徴し頭ハ
出給へるも皇祖天神小御在し坐ずくて何れ小御在

て然爲給ハむ言小断たる奇くく靈しき御事かりし
猶誓の委しき例ハ傳十三十九小云ひ又此の共誓
の事起ハ上五百五十小註る事共を合せ讀て曉る可き
者かり口説小誓者隨天理以直心而不疑是正直清明
カ如くして古意小非ず又鴨祐之説小此章所誓之神
則天御中至尊也と云る實小其理無きハ非るふり
允テ太兆ハ更ふり誓約共小立○誓約之中此云宇氣
る神在て其小就て爲る事ふり
譬能美難箇ハ弟二一書小も誓約之間と有て其小も
間を美難箇と訓り其誓給ふ中間ナカマを云ふり美難箇の
例ハ天御中至尊又古語拾遺小天中アマノミナカと有て天武天皇
十一年御紀小天中央アマノモトナカ十三年御紀小中央モトナカとも所見た

△忠を加那良受
と訓み必を

り然るを大同類聚方ハ其を倒反して奈伽母とも
有り皆最中の意ふり中臣本系帳ハ皇神之御中皇
御孫之御中万葉三ニ丁十ハ己智其智乃國之三中從十
四ニ丁十ハ左刀乃美奈加ハ所見たり○必ハ彼レハ
ず是と物を指決めて云辞ふり名義抄ハ加那良自
と有を以て受ハ不レの意ハ自とも活く事を知べ
弟一書弟三一書ハ汝所生兒ハ必當男矣と有ハ汝ハ
心実ハ清く有ハ其所生ハ女ハハ女ハハ當ハ男子ハ
とびと宣給へる意ふり此女ハハと云所必ハ當
言ふるを知べ餘皆然り万葉十三丁九丁ハ乾地乃神

乎禱而吾戀公以必不相在日八方と有り又後世の歌
集ハ必騷ハ萩の上風と有り又加那良受ハ必の
決ハ非ハ會ハをハ要ハをハ然ハ訓ハ事ハふり字書ハ必斷定
と有ハ如ハ○當生子ハ御子生奉流可斯と訓べ
必當ハ誓約の信を證し奉るハ爲ハ御子生奉るハ給
ハむとふり古事記ハ各宇氣比而生子と有る其を
記傳ハ御子宇麻那と訓べき由ハ云れつれども此ハ
上ハ必當の語有て言重けれハ然ハ云難うり○所生
ハ宇米良武と訓り弟三一書ハ此ハ同ハ弟一書ハ
那佐武と有れば同ハ所生をも其所ハ依て訓べ
此ハ二神共ハ違合して女神の御腹より出させ給ハ

△此事傳六百八
丁卯七云を猶
云々

るふゞざれば宇牟よりハ那須の方勝れるが如くと
雖も二柱御祖神の違合ハ依て生坐るをも陰神の石
隠坐て後ハ生坐るをも陽神の後ハ御身滌の時ハ成
出坐るをも共ハ通ハて言れば宇牟ハ美祢ハる言
ふり那須ハ其形体を成ふり又阿礼坐と云ハ顯坐の
義ふり然の抱る可うづ○女を多和夜賣と訓る
ハ古事記ハ我心清明故我所生之子得予弱女と有ハ
取れる者ふる可ハ下章第三一書日神の御言ハ吾雖
婦女何當避予又神功皇后神紀ハ吾婦女之加以不肖
ふで有ハ女の自謙る言ふり古事記神天詔天字受
降段ハ

賣神汝者雖有予弱女人與伊牟迦布神面勝神と見え
又倭建命御歌ハ此波煩曾多和夜賀比那表ハ怯弱細
の予弱肱と云事ハて女の形容を宣へるふれば寔ハ
予弱女の字の義ふるふり万葉一三丁ハ妹女乃袖吹
反三三丁予弱女之押日取懸四二丁予嬬女吾身之有
者又九丁丈夫毛如此戀家流乎幼婦之云ニ又四丁幼
婦常言雲知久予小小童之哭耳泣管六丁六ハ予弱女
乃念多和美予又六丁弱女乃惑尔縁而十二丁ハ予弱
女我者不定哭十三丁ハ予弱女尔吾者有友と有ふで
今本ハ多哀夜賣と訓たれども十五丁ハ予弱女

能於毛此美多礼氏と假字ふるも有れば古ハ多和夜
 賣ふりしふり然るを和名抄小婦人日本紀云于弱女
 人和名太上同と有ハ其頃の言ふり男子を麻須良袁
 源氏帚木三行小甚功うたて此人味多袁夜加ふる
 と見ゆ又三行人ケの多袁夜強を強手強ふと云ふ及ふて多和
 ハ知竹の心ちして流石小折へく七非ず未摘花三行君七少
 多袁夜改たる氣い以有給へ多花宴六南若少多袁の強弱小因れる語ふる
 夜改て強き心七知ぬあ可冷標五小甚大多美く私
 多袁夜改給へる物い松風五池初北以軸有多袁夜強記小見え疑くハ私
 たる氣い玉等と云むハ足ぬ可引玉蔓行記多袁夜強たるを和名抄ハ取
 夜改給へり若菜下三行琵琶を打置て雄氣強小作註小行動節度柔
 弾うけて多袁夜加ハ用成に給相木三行小柔撓文選小嫩弱と有
 多袁夜改けるを和と云作小所ハ清紅橘右小引る万葉一小妹女
 小御髪色ふて柳の糸みや多袁夜強と云見と有て字ハ様ニふ
 多袁人の心も多袁夜改ぬ可き御杖を充ふハ得得疎
 果カドウリけりと云ハ有ると云合合者者ふり
 ○濁心ハ上ふる黒心

△ハるも男の御装
 爲給へるを云ふハ傳六ハ
 天孫降臨章武
 宥禊神の申給
 へるハ唯唯經津
 主神獨爲文而
 吾非文者哉其
 辭氣慷慨有り
 △万葉十七三ハ麻
 須良和礼須良と
 訓り

小同ト言ふれども下ふる清心小對へて殊更ハ如此
 ハ書る者ふり故迹基流ハ素より訓べさハ非るか
 小男を麻須良袁と訓り弟一章日神の御言ハ設
 大夫武備と見えハ神武天皇御紀五瀬命の雄詰ハ慨哉
 大文夫云ニ有ガ如ク男子の自稱かり出雲風土記
 小男御子の事を麻須良神御子と見え古事記伊邪宮
 宮段小丹波之河上之麻須良と云人名も見えたれば
 袁を略きて唯麻須良とのミ云ても男稱ハ成れるふ
 る可ク右等ハ傳六七丁下小己小註せる事ふるが猶云
 ハハ同記白檮原宮段歌小阿米都ニ知抑理麻斯登ニ

△も荷籠をも

能於毛此美多礼氏と假字ふるも有れば古ハ多和夜
賣ふりしふり然るを和名抄小婦人日本紀云子弱女
人和名太上同と有ハ其頃の言ふり男子を麻須良袁
と云對ふるが物の剛きを子強ふと云ふ反ふて多和
美又多和ニふて同言ふて手の強弱小因れる語ふる
者ふり但右の子弱女人ハ御紀小見え不疑くハ私
記古事記より引れたるを和名抄ハ取
れたるふる同詩ハ空窈窕を多袁夜加と訓るも右小
同いける可し遊仙窟ハ卿卿と作て註ハ行動節度柔
弱兒と有り荀子柔從史記ハ柔撓文選ハ嫵弱と有
ふと皆女の兒ハ云所ふり借右小引る万葉一小媛女
と有る媛字ハ字書ハ糸色也與彩同と有り四一小媛
女と有る媛ハ又長弱兒風動兒とも有て字ハ様ニふ
れども言本ハ女兒の脆懶ハ○濁心ハ上ふる黒心
て手弱きより出たる者ふり

△はるも男の御装
爲給へるを云ふり
天孫降臨章武
雍梃神の申給
へる小豈唯經津
主神獨爲又而
吾非丈夫者哉其
辞氣慷慨有り

傳六ハ
見べし

△万葉十七テハ麻
須良和礼須良と
訓り

小同と言ふれども下ふる清心小對へて殊更小如此
ハ書る者ふり故迹基流ハ素より訓べき小非るか
り○男を麻須良袁と訓り弟一章日神の御言小設
大夫武備と見え神武天皇御紀五瀬命の雄詰小慨哉
大文夫云ニと有が如く男子のナルトコ自称かり出雲風土記
小男御子の事を麻須良神御子と見え古事記伊邪宮
宮段小丹波之河上之麻須良と云人名も見えたれば
袁を略きて唯麻須良との云ても男称と成れるふ
る可く右等ハ傳六テ丁六丁小己小註せる事ふるが猶云
ハ同記白檮原宮段歌小阿米都ニ知栞理麻斯登ニ

△佛足石歌ハ麻須良子ト云ルハ釋迦を尊とて云リ

那掃佐祁流斗米と有ハ天地千人益人々何故黥る利
目と云事ハ大久米命ハ當時世ハ比無キ丈夫ハて
御在つれば其事を甚しく美称ふごとく又其黥る如
く目の大く爰利ふりしを戲笑ひたる歌ふり此ハ此
歌ハ用無れども千人ハ益と云ガ麻須良衰ふる謂を
明さひとして引るふり記傳ハ此歌を説けたる狀此と
ハ異かり此ハ予ガこく思寄て
故めたる説ふるを委して事ハ同
天皇元年御紀ハ引出て云べく
丈夫とも益荒夫とも益荒下子とも麻須良多祁乎と
も有て數知ず多キ事ふるガ益進荒雄ふりと通ゆる
を益進マシムの略り切りて麻須と成れるハ荒雄と云事の

重複れるふり万葉十六ニテハ荒雄良乎將來可不来
可等又荒雄良我去尔之日從又荒雄良者妻子之産業
乎婆不念呂ふぞ有り然れば下略をきて麻須良とも云
ひ上を略して荒雄とのこも云言ふめり右の委しき
由ハ傳六卷
男子の下ハ云るを見て知べきふり丈夫の字ハ公羊
傳ハ出たり毛詩ハ武夫と有ふぞ共ハ麻須良衰と云
所ふり又ハ雲御抄ハ○清心ハ下章第三一書ハも
健勇と書て然訓でたり
如有清心者必當生男矣と見え又下ハ故実以清心復
上來耳とも有り此ハ第一一書ハ若汝心明淨云こ
と有彼を記ハ汝心之清明何以知と有ハ對へて我
心清明故云ことも有り續紀ハ右百七十一ハ引る外

△方葉十三行、吾情
清濁之池之有る
る清心を倒して
云ふり

ふも第二十九詔、不負久、淨岐心乎、持以天、第三十三詔、
不負、能久、淨伎心乎、以天、第五十九詔、不負、清直心乎、
知ふ、有て、実、不、清心、ハ、黒心、又、ハ、濁心、の對ふる者、
り、○右、不、與、如、共、誓、之、所、見、たる、不、此、不、如、吾、所、生、是、女、
者、則、可、以、為、有、濁心、若、是、男、者、則、可、以、為、有、清心、第二、一、
書、不、折、言、約、之、間、生、女、為、黒心、生、男、為、赤心、下、章、第三、一、書、
不、於、是、素、彥、鳴、尊、誓、之、曰、吾、若、懷、不、善、而、復、上、來、者、吾、今、
鑿、玉、生、兒、必、當、為、女、矣、云、云、如、有、清心、者、必、當、生、男、矣、云、
云、有て、共、誓、ひ、給、ふ、證、を、素、彥、鳴、尊、の、御方より申、さ、せ、給、ひ、
又、弟、一、一、書、不、ハ、於、是、日、神、共、素、彥、鳴、尊、相、對、面、立、誓、ひ、
而

△此、不、就、て、説、有、り
傳、十六、行、云、れ、
此、文、の、任、ふ、て、ハ

若、汝、心、明、淨、不、有、陵、奪、之、意、者、汝、所、生、兒、必、當、男、矣、と、有、
り、弟、三、一、書、不、も、右、不、同、ト、く、汝、若、不、有、奸、賊、之、心、者、汝、
所、生、子、必、男、矣、と、有て、此、不、ハ、若、不、誓、給、ふ、日、神、の、御、
方、より、其證、の、事、ハ、宣、ハ、ず、し、て、素、彥、鳴、尊、より、申、給、へ、る、
任、不、其、定、め、を、云、云、と、詔、給、ひ、け、り、然、る、に、素、彥、鳴、尊、の、
こ、の、御、誓、ふ、て、此、不、共、と、云、ひ、古、事、記、不、各、と、有て、共、與、
不、為、さ、せ、給、ふ、徵、信、を、見、奉、る、所、無、不、似、たり、古、事、記、不、
ハ、此、不、然、
口、固、め、さ、せ、御、在、し、坐、し、御、事、の、見、え、ず、し、て、下、不、至、り、
て、尔、速、須、須、佐、之、男、命、白、于、天、照、太、神、我、心、清、明、故、我、所、生、
之、子、得、手、弱、女、と、有、ハ、甚、く、異、
ふ、る、傳、ふ、れ、ハ、此、不、取、り、難、し、故、右、の、二、を、合、せ、て、思、ふ、
不、素、彥、鳴、尊、若、清心、の、御、在、し、坐、ご、し、む、不、ハ、女、御、子、成、

出給ふ可ければ日神ハ男御子引成出御在坐つ可
く云固めさせ給ひ若濁心御在坐ざらむハ必男
御生_子出御在坐べければ日神ハ女御子を成出給
ふ可くところ豫て約束させ給ひけめ然れば此ハ最
前ハ日神の女御子等を成出給ひける時己ハ素戔嗚
尊の赤心ハ顕りれさせ給ひけるハ引續きて素戔嗚
尊の男御子を生奉らせ給へる故ハ弟三ハ一書ハ則稱
之曰吾正哉吾勝故名之云々宣ひ其終ハ其素戔嗚
尊所生之兒皆己男矣故日神方知素戔嗚尊元有赤心
と有が如く少くも事過たず誓ひ勝せ給へる者ふり

但右の正哉吾勝ハ天照太神ハ勝奉らせ給へり
ハ非ず男女の御子を以て神心の清濁を證し見
奉る心元ハ為給ひけるハ男御子を得させ給ひつ
濁心ハ勝負ハ御誓然れども日神の御上ハ女御子
云此係て云ふ御誓然れども日神の御上ハ女御子
を生出させ給へる時ハ素戔嗚尊の濁心御在坐ざ
る事を所知食す上ハ今迄疑給へりハ隈ニ甚明ら
ふ成らせ御在坐けむを然るふても下ハ是時天照太
神勅曰原其物根則ハ坂瓊之五百箇御統者是吾物也
故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉又勅曰其十握劍
者是素戔嗚尊物也故此三女神悉是爾兒便授之素戔
嗚尊と有て此ハ素戔嗚尊の御言ハ立難きハ似

たりと雖も猶熟思ふ小此如吾所生是女者則可以
 爲有濁心若是男者則可以爲有清心と有る此ハ右小
 も云る如く素戔嗚尊御一己の事ハ有れども如此
 く男女を以て清濁を分たせ給ふ所ふれバ日神の御
 方小女御子の生出させ御在る坐でか却りて黒心の
 御在る坐小も通ふ可き語勢ふて有れバ其生給ふ
 方小就てハ^{正哉}吾勝と宜へる如く素戔嗚尊ふむ誓勝せ
 給へれども其物根小因る時ハ日神も亦誓勝せ給へ
 るふれば此ハ相共小異しき御心の御在る坐ざる由
 の徴見る所ふして其事の極まる所互ひ小平準ふ

御事とこ仰ぎ伺奉らるる事ふりけれ然れば其
 小分れて疑ひも疑ハれも爲奉らせ給ふ程の御事初こる方
 黒心ふむ且ても御在る坐ざる故小起れる事ふ
 る事云も更ふるが素戔嗚尊ハ然る清き御心ふる
 う日神も共小誓し給ひし事を請奉りて給ふ
 小ハ有れれども日神ハ本より然る御疑も何も御在
 り坐ざりしりども其天上小参上りて給ふ御所態の
 餘り小競凌しりつれば異しき御心や御在る坐し
 むと思ひ成りて給ふのこころ有れ然りて
 此も亦誓ひ負させ給ふ可き謂れ無き御事ふり

於是天照太神乃索取素戔嗚
 尊十握劔打折爲三段濯於天

眞名井齧然咀嚼ミナナノイノサガミニカク
 眞名井ミナナノイ而吹棄氣噴之テロフキウツルイブキ狹霧サガリミ吹棄氣フキウツルイ
 武タケ而吹棄氣噴之テロフキウツルイブキ狹霧サガリミ吹棄氣フキウツルイ
 霧キリ此コレ云イフ浮ウツル枳キ于ウ都ツ屢ル所アリ生マレル神カミ號ナ
 伊イ浮ウツル岐キ能ニ佐サ擬ギ理リ所アリ生マレル神カミ號ナ
 曰ハ田タ心ココロ姬メノミコト次ツギニ湍ツ津ツ姬メノミコト次ツギニ市イチ杵チ嶋シマ
 姫メノミコト凡スベテ三ミ女メノミコト矣マス

此ハ謂ゆる三女神の成出坐の件ふり此ハ右の本
 文の如く天照太神乃索取素戔嗚尊十握劔打折爲三
 段云と有る本として三女神の御劔より成出坐し
 趣小於てハ異ふゞざれども少クハ其傳ニ依て同
 ぶらゝざる所ふむ有ける古事記ハ故尔各中置天
 安河而宇氣布時天照太御神先乞度建速須佐之男命
 所佩十拳劔打折三段而奴那登母母由良尔振滌天之
 眞名井而云と有て此の趣小同ト神宮雜例集小出
 たる皇太神の御教覺ふも吾高天原ニ在時素戔嗚尊
 乃帶十握劔ヲ索取三段打折リ爲所生三女神ヲ云

と有て此も亦異説ふハ非るふり
但文の状を見小此
正書を取れたり
 文字遣を見小全く然ふり其ハ古き然る傳の神宮ハ
在つるふれども御紀の御撰有て後ハ此を本立て
爲る事凡ての事ふれども御撰有て後ハ此を本立て
那登母ニ由良ふと有ハ十握劍ハ似着ハくごる
語ふる小就て予別ハ考ふる所有り其ハ次小第一一
次小第二一書を引て論ふを見べさふり
 書小日神乃設大夫武備躬帶十握劍九握劍八握劍云
 ニ先食所帶十握劍生兒號瀛津鳴姬又食九握劍生兒
 號湍津姬又食八握劍生兒號田心姬凡三女神矣と有
 て次小己而素戔嗚尊以其頸所嬰五百箇御統之瓊濯
 于天渟名井亦名去来之眞名井而食之乃生兒云々凡
 五男神矣と見えて此小てハ日神も素戔嗚尊も御自

△雖も此も其説
 を切つ時ハ其物
 根を相換て給へ
 る事を傳漏せり
 るれハ今其を反
 して見ると其も三
 女神ハ瓊小五男神
 ハ劍小成坐る云々
 小第二一書の趣ハ
 合る味ハ有て傳十
 六三小云り此仕

其大御身小佩せ給ふ物実を以て物爲給へる状ふれ
 ハ甚く異ふる傳ふり其小てハ此小是時天照太神勅
 曰原其物根則云々故五男神悉是爾兒と詔別給ふ御事の
 又勅曰云々故此三女神悉是爾兒と詔別給ふ御事の
 御在り坐小合ざれば此一書の任ふてハ取難く其ハ
日神
 の所生るハ三女神ふり素戔嗚尊の所成るハ五男神
 ふりと雖も其物根小因て五男神ハ日神の御子たり
 三女神ハ素戔嗚尊の御子 第三一書も右と同一事小
 と坐す所由小在れバふり
 て於是日神先食其十握劍云々又食九握劍云々又食
 八握劍云々己而素戔嗚尊含其左髻所纏五百箇之御
統瓊
 便化生男矣云々有て其成出坐し神名小ハ異説も

有れども各其物根ハ御自の御物ふれば此正書の趣
ふ合はず下章第三一書ふるも然り於是日神先齧十
握劔云云素戔嗚尊乃輻轡然解其左髻所纏五百箇統
之瓊綸云云有て此も右と同し事ふて其物根の事
ふ於てハ正書又古事記の趣ハ甚く異ふる者ふり
此ハ先齧十握劔云云と有ハ次ハ九握劔次ハ八握劔
を食給へる事右の先字を以て知べさふり然れが第
一書第一一書と下章第三一書と共ハ右の三劔の
事有て此ハ素戔取十握劔打折爲三段と有ハ打合さる
者ふ
右の傳ハ何れも三女神ハ劔より五男神ハ玉
より成出坐る趣ふて此ハ異説無きを唯第一一書
のハ其ハ倒反カサマふりけれハ甚別ふる傳ハ有れど

も亦強小棄べくごる所由ふひ有ける其ハ天照太
神謂素戔嗚尊曰以吾所帶之劔今當奉汝汝以汝所持
八坂瓊之曲玉可以授予矣如此約束共相換取已而天
照太神則以八坂瓊之曲玉寄於天真名井嚙断瓊端
而吹出氣噴之中化生神号市杵嶋姬命云云又嚙断瓊
中而吹出氣噴之中化生神号田心姬命云云又嚙断瓊
尾而吹出氣噴之中化生神号湍津姬命云云凡三女神
と有て次ハ於是素戔嗚尊以所持劔寄於天真名井
嚙断劔末而吹出氣噴之中化生神云云凡五男神云尔
と見えて此一傳のハ他ハ類説無れども其物根の事

も物ころハ上ふるとハ異ふりけれ相換て御子を成
 給へる事允ての例違ハざるを猶三女神の玉よ
 り成坐る傳ふどハ殊ふ爰たきハ就て此を考ふ古
 事記ハ三女神ハ例の十拳劔より成生る傳ふ多ハ奴
 那登母由良ハ云語有ハ劔ハ更ハ由無キ語ハ
 然計の事ハ闇々ハざる當時此八字以音下倣之
 細書をさへハ物爲ハ書ころ可くも非るハ然る語
 の交れるハ若くハ此一書と同ハ傳ふりけむを佗傳
 ニハ三女神ハ劔より成坐れバ已く其多きハ牽れて
 改革たりけむを如何してハ此語のハ残れるを唯有

の任ハ書されたる故ハ斯る似氣ふ事ハ交れるハ
 ころ有けめ然レハ此弟ニ一書ハ方人たる者唯古事
記のハ有リ但此ハ上ハ引たる雜例
 集ふる皇太神の御言ハ素多鳴尊乃帶十握劔乎索
取三段打折豆所生三女神乎と有を正しく知ふが
棄るハ似たりハハ此外ハ古より傳來れる事の紀
記の文ハ似着ハハ其ハ據て文を成す例多けれ
バ此正書ハ依て改書した何を以て然ハ云ずハ
りハ云むも強言ふハ
 先五男神の生坐る物根を劔と爲む其謂れ有リ弟
 一書ハ日神云ニ乃設丈夫武備躬帶十握劔九握劔
 ハ握劔と有て丈夫の狀ハ大御身を裝給ひて武備を
 設給ふ最初ハ先劔の事を主と爲給へるを以ても此
 物根ハ因て男御子の生坐む事信ハ正ハ然る可ハ又

其五男神の中て劔由有るハ姓氏録天都比古
祢命子天麻比止都祢命見えたる古語拾遺令
天目一箇神作雜刀斧及鐵鐸有る是ふり然る神の
此御子孫成御在る坐と云も各其由来る所有と見
る時ハ如何ハ明くふくごくじ一又宝鏡開始章弟に
為治工採天香山之金以作日矛又全剥真名鹿之皮以
作天明鞆と有る石凝姥命ハ亦名天香山命と申して
恐徳耳尊の御子天火明命の子あり鏡と劔と物ハ別
ふれとも共ふ天羽鞆を用ひて鍛ふ物ふれハ其由無
べくくず若て右の三女神の玉由有る事ハ下二百
五丁引く筑前風土記以青麩玉置奥津宮之表以ハ
坂瓊紫玉置中津宮之表と見え釋ふも胸肩神體為玉

之由見風土記と云ひ又弟三一書以日神所生三女
神者使降居于葦原中國之宇佐嶋矣と有ハ神名式以
豊前國宇佐郡比賣神社大神と見えたる是即ハ幡三
所の一以て神代よりの鎮座ふるが此三女神を一座と
して玉依姬命と申奉る所由傳十七五丁三委く註
すが如く又神名式ふる山城國愛宕郡賀茂御祖神社
二座並名神大月て有ハ大己貴命玉依姬命御在
坐す其も宗像姬神也と傳ふる慥ふる説有て己出
雲神賀詞講義註也又此下如く如此く御名ふハ負
御在る坐すを以ても此三女神ハ玉由因て成坐る

うゝ玉依姬命とハ称奉れる者ふり猶由良比賣神と申す御名の御在せるも彼奴那登母ニ由良と云事縁有て如何考へ見ても予が心ハ五男神ハ劍小依て生出給ひ三女神ハ玉小因て成出させ給ひける事疑無くふむ有ける故餘の傳ニよりハ甚勝れる愛たり傳ふるむとバ云ふりけり此ハ其條と云就て云事ハ有れども予が心の定れる所以を以て云でハ聞え難き故小此ハ豫め先驚う置く事ふりう但ハ幡の比賣神を海神の御女の玉依姬命と古くより云説も有り賀茂の御祖神を建角身命の御女ふる建玉依日賣ふりと云説も有れども皆う其一を知て二を知ざる説ふれハ古人と雖も甚鹿漏ふ

りり者ふりり○於是ハ古事記ハ故尔各中置天安河而守氣布時と有て此小てハ其事無くと雖も弟三、一書小も日神與素戔嗚尊隔天安河而相對乃立誓約曰と有が如く天安河を狹て相對立せ御在る坐ふかり其ハ日太神丈夫の装束武備を設させ御在る坐て申すも己尊一柱のこハ御在る坐ずして八百万千万神を相率が御在る坐べく素戔嗚尊ハた御伴神等を引て神登り御在る坐けむ事上百五十六丁六丁小註せるが如くふれハ此を近く申さバ河を隔て對陣陣給へるふり崇神天皇十年御紀小校河比之各相挑焉と

有と同一意味ふるを思ふ可但弟一書小乃設丈夫武備と有り下章弟
三、一書小乃躬裝武備と有を見れば日神一柱の如く
小ハ有れども弟一書小起兵詰問と見えたりれば必
衆神を従給へる事知べし此ハ天安河ハ傳十九丁小
且ても人の心着りて有事あり
云り中置ハ同記黄泉小尔于引磐引塞其黄泉比良坂
其石置中云こと有も磐を其中間小挟み隔つる事ふ
り弟三、一書小隔天安河而相對而立と有る此故事を
取て万葉十八五丁七夕歌小安麻泥良須可未能御代
欲里夜洲能河波奈加尔故太氏二年可比太知と詠り
又万葉十一八丁小紅之瀾引道乎一云須蘇中置而
有も道小在れ河小在れ中挟み隔つるを云ふり猶

隔の事ハ傳十八三丁小云べし又右小引る崇神天皇御紀ふる挾河云くの事を
各中挾河而對立相挑と古事記ハ云り○十握劍傳
中挾ハ中置と云小異る者あり
十七丁小云り○索取ハ次ハ乞取と作り古事記小
ハ乞度と有を記傳七四丁小度とハ今ハ人小遣をの
こ云へど古ハ此方へ取をも云しかりと有り今按
ふ小乞度ハ與奪ふぞ云ガ如く授くると受ると一ハ
合せたり言ふて乞コヒハ天照太神のふり度ハ素戔嗚尊
のふり斯れハ此の如く受取給ふ一向小就て索取と
云とハ同コヒるる可し同コヒ乞取の語亦も万葉
七丁八 小欲得裏登乞者令取と有ハ授與ふる方あり

七ハバ令取むとふり索字名義扱ハ母登年又許布又
登流ふどの訓有り○打折為三段古事記ハ打折三段
と有ハ古語の任ふして此ハ漢文の格ふり舊事記ハ
ハ十握劔為三段との訓有て打折の語無く借此ハ唯
ハ折との云ても有ぬ可き所ふるを斯云ふ其時
の御有狀ふひ甚く烈く武事御事ふりけし木ふ
とを折も打折と云へハ甚くカを入れて強く折を云
をも准くへ知べし○三段の事ハ傳十三ハ十ハ云り此
ハ劔鋒と劔又ハ劔頭ハ十ハ三段ハ打折給へるふる可
事ハ異ふれハ弟二一書ハ八坂瓊之曲玉より三女

神の生坐る傳の有ハ瓊端又瓊中又瑞尾と上中下三
刻ハ云るをも合せ考ふ可く此ハ因て成坐る神名
も其ハ由と見えて劔鋒又瓊端ハ其物の進極れる
尖鋒ふり田心姫命を古事記ハ多紀理毘賣命と有ハ
由有り劔又又瓊中ハ申す迄も無く市杵島姫命を舊
事記ハ中津島姫命と有り秦氏本系帳ハ胸形中都大
神と有れハ灼然事ふり劔頭ハ手ハ神ハ握ハ手ハ處瓊尾ハ
瓊緒ハて御手ハ持セ御在く坐る所ハ有けれハ共
ハ手上下も謂つ可く湍津姫命を舊事記ハ高津姫命
と有ハ大ハ由縁有る事ハふひ有ける
但劔と玉と物
根の事ハ就て

論有て己小右ふも少云るを委くくハ傳十七卷ハ云
べ但其一書ハ瑞瓊端より市杵島姫命瓊中より田
心姫命有ハ誤ふる事如此く三段の高低ハ就て定
むる時ハ著明く知らるるふり又此ハ瑞津姫命の次
小市杵島姫命有ハ前後
相違へる事又明くふり
○天真名井ハ記傳七
小書紀一書ハ天渟名井有を合せて思ふハ眞渟名
井を約めたる名ハ眞ハ美称渟ハ凡て水の堪たる
所を云ふ名ハ假字ハ掘^借字ハ掘^{弟二書}天真名井三處マ
も有れば此井ハ即天安河の瀨^{の中}ハ掘^{弟二書}天真名井三處マ
指て云ふハ別ハ尋常云ふ井有ハ非^{以上}ず取意と
有ハ如く此ハ就て猶其事を委く云むハ眞渟の
渟ハ水の溜れる所を云ふり弟二書ハ掘天真名井

三處マ云ハ大同本記ハ天忍石乃長井之水マ云語の
有る其ハ万葉十一^{三丁}ハ泊湍川速見早湍乎結上而
有ハ並びて青山之石垣沼間乃水隠ルとも有ハ如
く大石を垣の如く疊みて水を汲用ふと處マ爲るを
云て其ハ天安河の川岸ハ掘湛へて井マ成し給へる
を云ふり出雲神賀詞ハ彼方能古川^{古川}席^{古川}此方能古川^{古川}席^{古川}
ハ生立^{生立}若水沼間^{若水}能弥若^{弥若}敷^敷御若^{御若}敷^敷坐^坐有る席^席ハ岸
の誤ふる事後釋の説の如く生立の成立るハ石を
新ハ疊成て沼間マ成すハ依て若マ云るハ風^土記
仁多郡三津郷の下ハ國造神吉事奏參^{向朝廷}時其水

△帝陸風土記小鹿島
郡沼尾社有り次小
其社南郡家北沼
尾池古先曰神世直
天流来沼云々見
也

△帝陸風土記茨城郡
條小郡東十里采
原岳昔倭武天皇
停留岳上進奉十
御膳時令水部新
掘清水出泉淨香
飲喫尤好初能淨
水故俗曰與人多麻
礼留弥都可奈
由是里名謂田録之
有リ淨を多麻礼留
と訓る是なり

汲出而用初也と有を以て若水沼間と云所由をも曉
る可く此小例して此も天安河の川岸の掘て若水
沼間と爲させ給ひしを天若眞名井とハ云ふりけり△神
武天皇の大御子等二柱坐る其片方を神八井命と申
奉り其片方を神沼沼名川河耳尊と申奉れるも八井ハ弥井
淳名川ハ川カハスミ淳の義ふ依て祢奉りけむをも思ふ可
き物ふふむ有ける然れバ川岸を掘て水の淳ツクれる處
を淳ツクと云ひ其淳と成れる間マヒを沼間とハ云ふりけり△
淳字名義抄小登柳年ツク又ツク知伊流とも都ツク之丈とも多
麻流とも志豆麻流とも有ふて其義明くけり又沼字
をツク奴麻又古伊祁又伊祁と有ふり字書小沼池之別名
又圓曰池曲曰沼と有が如く川岸を掘曲たる是なり

井ハ記傳の右に引く續古ハ泉ツクふ在れ川ツクふ在れ用ふる水を汲む所を云
ふりて云れたるが如く其ハ神名式小座摩巫祭神五
座ツクの中ふる生井神福井神綱長井神三柱ハ御井神を
祢別たる御名ふるが生井ハ行井ツクふて流水を云ひ福
井ハ裂氷ツクふて岩間ふより涌出る謂ゆる醴泉ツクを云
ひ綱長井ハ津長井ふて其津ハ水脈ツクを云ふれバ此ハ
和名抄小井鑿地取水也和名爲と有る常の堀井を云
ふ由祈年祭詞講義小委く云るが如く又外宮儀式
帳小部野井庭神社清野井庭神社ふと有る井庭ハ井
と成ツクけり場所と云るふて此も唯水を汲用ふる小就

て云のこふて別義有ふ非れども部を神名式ふハ志
度美マ有り然れバ滴水の義ふて垂水を垂井ふ云
ふ同づうる可く又溝を字名授と云も万葉小井堤マ
云小等しく用ふ水の行く道を云り又和名抄小堰埭
以土過水也和名井世木と有も溝又河を塞て水を引
ずる料小爲るふて何れふるも井と云事同づるふり
斯れバ掘井をのこ井と云ふハ非る事右の例共ふて
明らうふり猶云らぐ記傳ハ書紀天真名井を云ふ傳ふハ
天安河を云ず河を云る傳ふハ此井を云ず始中置
天安河と云置て今此小如此云り天安河天真名井共

小別異小非る事明らけし取と有が如く天安河の川
岸小水沼を掘て井小用給ふが故小天真名井とハ云
小づ有けるハ訣小天真名井天上之井寄清心之源也
給ハ此ハ唯劔を振濯がせ給ふのこころ有けれ外
小意有ハ非下又纂疏ハ此水者謂天真水非謂江河
之水故曰天真名井と宣へるも心得ず眞水とハ潮水
ふど小對へて尋常の水を眞水と云ふり縦ヤ天真名
井ハ天安河と別ふるハ殊更ハ號く可き又通諸小後漢
東夷傳曰海中女國無男人或傳其國有神井闕之輒
生子云參同契集解曰女人之國無男子若欲孕則必擇
日一日三時俯觀井底亦借眞水之氣是井中之象以爲
交感方能懷妊所謂陰陽施化之精天地自然相感之道
如此云事ハ有ハ此の訛傳ありとハ聞ゆるが神名
其小眞水と有たりとて此の證ハ立ぬ事あり
式小丹後國丹波郡比沼麻奈爲神社と有ハ大同本記

水取文小天忍石乃長井之水を下賜ハれる下小從日
向高千穂宮移丹波國魚井原マナ井ハラと有る水ふり儲比沼ハ
水沼ミヌふて右の天安河の水を高千穂宮小移せる小起
れり儲傳十四三十一丁小引る攝津風土記小止與守可乃
賣神の稻倉山より退給ふ所小有事不可得已遂還於
丹波國比邊乃麻奈葺地名と有ハ後名を初小及がせる
地名ふるが此比邊ハ比沼麻奈為よりハ以前の地名
ふり此地を今小土形里と云ひ比沼山と云も有て比
沼ミヌハ紛ハハハ故小互誤れる事多し儲又此
小妙ふる因縁有けり神名帳考證同國與謝郡須代神

社の下小引る大同本記小素戔嗚尊所生三女神奉助
天孫而為天孫所祭止詔之神丹波國與佐郡比沼真名
井坐須勢理姬乃齋奉御饌都止由居乃神乎と有が如
く幽ふて三女神ハ豊受大神を持齋うせ御在り坐小
其成坐る始も其仕奉給ふ大神も共小天真名井の由
緒の御在り坐るも奇異小妙ふる御事ふり傳十六十
丁小云を合せて考ふ可く又此の第三一書小此三女神
を此筑紫水沼君等祭神是也と有り水沼ハ右小云る如く天真
名井ハ天真滄之井小由緒有り儲此ハ和名按郡名小
筑後國三瀨美無萬と有て本國神名帳小正六位上宗像

高野宮
内庫

高野宮
内庫

神宗形若草神宗形御井天社三井郡從五位下宗形金
 己呂神宗形神三瀨郡^{後五位下}宗像神山門郡正六位上宗形本
 神上妻郡正六位上宗形神ふで有る中三瀨郡ふる
 づ其小ハ當りせ給ふ可きを傳十八^{九十五}丁云事ふれ
 とも少其水沼と云小由有を驚うし置ふむ^{但此ハ}
 離れたる事の如く小ハ有れども此水沼と云ハ天安
 河ふも天真名井と云ふも係りて由有る事右小註せ
 る如くふれがふり見む^又神名式小出雲國意宇郡真
 入深く此を思ふ可し^大名神と申すハ
 名井神社と申す有り當郡熊野坐神社^大と申すハ
 御父大神小渡りせ給へば由有るふや又志保美神社
 と申すハ五男神の中ふる熊野忍踏命と聞ゆるを以

